

「フロマートカ神学」

2014年09月26日

佐藤優氏は驚異的な執筆活動をし、諸々の著作が本屋に山積みされている。彼が「この本が私の人生の方向を定めた」と言うヨゼフ・ルクル・フロマートカの『人間への途上にある福音 キリスト教信仰論』（以下—人間への）が平野清美氏の翻訳、佐藤氏本人の監修で出版された。

私の神学生時代には、フロマートカは共産主義体制下の神学者ロマドカと言われていた。あまり読まれてはいなかったと思う。K・バルトとD・ボンヘッファーがよく読まれていた。バルトはナチズムに抵抗する「バルメン宣言」を起草した。膨大な組織神学書を書き、20世紀最大の神学者と言われている。フロマートカは「カール・バルトと仲間たちの力強い一撃によって、戦前の神学構造の基盤がゆらぎ、根幹の結びつきが弱まったときのことを思い出す」と書いている。バルトによって、自然主義神学からキリストに集中する弁証法神学に教会は大転換した。ボンヘッファーはヒトラーの暗殺を計画したが、発覚し、絞首刑になった。「神の前で、神と共に、我々は神なしに生きる」という言葉を書き残している。今日の教会に最も大きな影響を与えた神学者の一人である。フロマートカは「ボンヘッファーによる社会と精神的生活の脱宗教化という言葉がずっとささやかれている。世界は思想的、技術的、文化的に成人化し、いわゆる宗教の支えは不要になり、科学的仮説としても社会の支えとしても家庭での気持ちの面の飾りとしても神は不要になった、と言われるのを耳にする。それはまさにその通りである」と書いている。

フロマートカは1889年、旧オーストリア帝国で生まれ、神学教育を受けて、プラハで牧師になった。その後、神学大学で組織神学の教授をしていたが、ナチズムに反対し、アメリカに亡命、神学校の客員教授になっている。戦後、チェコスロバキアに帰国し、神学大学の学長になり、1958年から11年間、キリスト者平和会議の議長も務めている。そして1969年、80歳で亡くなった。経歴からも分かるように、ナチズム、共産主義、アメリカを体験し、世界におけるキリスト教の意味と役割を問う神学をしている。

『人間への』は、ナザレのイエスの言動と生涯を中核にして、旧約聖書のイスラエル史から使徒たちの証言などをふまえ、組織神学的に多様な信仰論を展開している。原本の副題を「聖書と教会の信仰告白に関する研究の入門」としているように、読み易い本である。下記の言葉が心に残る。「福音とは、気の弱い人の悲哀や、人々の善意のなれあいとは違う。神の国とは、イエスが告知し具現化しているように、真理による偽りとの戦い、聖性による不浄との戦い、愛による利己主義との戦い、恵みによる傲慢な自己義認との戦いを意味する。本物の福音が宣べ伝えられるところでは、人間の最も苛烈な反抗が発生し、生ける真理と変える力を持つ愛にとって厄介極まりない敵が立ち並ぶ。この戦いは延々と続く。イエスは闇の力に勝ち、何度か述べてきたように、人々の罪を背負うことによって、罪を乗り越え、死によって死を克服した。」

佐藤氏は、フロマートカ神学から「我々が活動するフィールドは、この世界である。キリストを信じる者こそがこの世界を誰よりもリアルに理解できる」と教えられたのであろう。教会とこの世を二元的に捉えるのではなく、世界は神の祝福の御手の中にある。それゆえに、信仰者は、罪と死に勝利した主イエスに押し出され、真理と愛と恵みを証する戦いに向かわせられる。